

心はどこまで〈拡張〉されるのか
How far can mind be “extended”?

神崎祥輝

Abstract

To what extent mind can be extended according to the canonical “Extended Mind Thesis” by Clark and Chalmers (1998) is not clear. Although Clark and Chalmers imply that not only cognitive processes and belief but also other types of mental states can be “extended”, the precise criterion has not been given. This paper shows some traits of mental states that are necessary for the logical possibility of extension and provides some external vehicles that can be seen as “extended” cognitive processes or “extended” mental states.

(1) 研究テーマ

「心はどこで終わり、どこから心なしの世界が始まるのだろうか」(Clark and Chalmers 1998, 7)。Clark and Chalmers (1998)が〈心は頭蓋や皮膚を越えて外的環境へと拡張する〉という〈拡張された心〉理論(Extended Mind Thesis)を提唱して以来、心の〈拡張〉は三者三様に論じられてきた。その結果、EMTは反対派から数多くの批判が向けられるのみならず、擁護派の間でも〈拡張〉の概念や〈心〉の概念の内実をめぐる見解が大きく割れるようになってしまった。もはや、EMTについての統一見解は存在しない。

本稿ではまず先行研究の整理として、Clark and Chalmers (1998)におけるオリジナルのEMT——記号計算のEMTと信念のEMT——の議論の流れを確認する。そのうえで本稿独自の主張として、ClarkとChalmersの議論に基づき、〈拡張〉の論理的可能性が認められる、その他の心的状態のタイプを検討する。最後に今後の展望として、〈拡張〉が実現されうる具体的な環境媒体についても軽く言及する。

(2) 研究の背景・先行研究

Clark and Chalmers (1998)においてEMTは、まず記号計算のEMT、次いで信念のEMTという順番で導入される。しかし、ClarkとChalmersは記号計算のEMTと信念のEMTで満足しているわけではない。明示的な議論こ

そなされてはいないものの、彼らは同論文内で欲求や情動も〈拡張〉されうることを示唆しており、EMTがあらゆるタイプの心的状態に適用されることを期待しているようにも窺える（Clark and Chalmers 1998, 12）。

記号計算の EMT と信念の EMT についての個別の論証に移る前にまずは、Clark と Chalmers の全体的なスキームを概観しておきたい。H. Putnam や T. Burge のような（内容）外在主義とは対極的に、Clark と Chalmers は機能主義に立脚して心の外在性を訴える。本稿では（内容）外在主義についての詳細な説明は省略するが、一言でいえば（内容）外在主義は機能主義、すなわち行動に対する因果的機能のみに基づく心の説明理論を拒絶する（cf: Putnam 1975; Burge 1986）。それと対極的であるとはつまり、EMT は因果的機能に基づきつつも、心が個体の脳内や身体内にとどまることなく、外的環境中においても実現されうることを主張するのである。

Clark と Chalmers は以下のような思考実験を用いることで、記号計算の EMT を論じようとする（Clark and Chalmers 1998, 7-8）。

- (1) Inga が、様々な二次元幾何学図形を投影したコンピュータースクリーンを眺めており、画面上の〈ソケット〉にピッタリと当てはまる図形を選択するように問われる。Inga はソケットに図形が当てはまるように、頭の中で図形を回転操作しなければならない。
- (2) Otto が、同様のコンピュータースクリーンを眺めているが、今度は手元のコントローラーの回転ボタンを押して実際に画面上の図形を回転させるか、頭の中のイメージを（上の(1)と同様に）回転させるかを選択することができる。
- (3) Otto が、同様のコンピュータースクリーンを眺めている。Otto はしかし、脳内に特殊な神経インプラントを埋め込まれており、脳内でこの神経インプラントを(2)のケースにおける回転ボタンのように機動させるか、自力で頭の中のイメージを回転させるかを選択することができる。

Clark と Chalmers によれば、以上の 3 つのケースにおいて、脳内での（心的表象としての）図形の回転操作・回転ボタンを用いた（画面上の）図形の回転操作・神経インプラントを用いた回転操作は全て、〈ソケットに図形がはまるように回転させる〉という同じ機能的役割を果たしている。そのため機能主義の観点からは、体表や頭蓋骨といった物理的境界の内側での操作——心的表象を用いた操作——も、外側での操作——スクリーン上の表象を用い

た操作——も、等しく真正の記号計算とみなすべきである (Clark and Chalmers 1998, 7)。

記号計算の EMT に続いて展開される、Clark と Chalmers による信念の EMT の議論も見てみよう (Clark and Chalmers 1998, 12-4)。

- (4) Inga は、MoMA で開催される展覧会のことを耳にした。彼女はその展覧会を訪れることを決めた。彼女は〈美術館が 53 番街にある〉ということ思い出し、歩いて美術館へ辿り着いた。
- (5) Otto は認知症に苛まれており、自身の脳内記憶の代わりとしてノートを常に携帯している。彼は新たな情報を得るたび、それをノートに記録する。Otto は、MoMA で開催される展覧会のことを耳にした。彼はその展覧会を訪れることを決めた。自身のノートを参照し、そこに〈美術館は 53 番街にある〉と書かれていたので、歩いて美術館へと辿り着いた。

1 番目のケースにおいて Inga は、〈美術館は 53 番街にある〉という信念を抱いており、その信念が〈美術館に行く〉という行動を因果的に引き起こしたと捉えられる。同様に 2 番目のケースにおいても、〈美術館は 53 番街にある〉というノート上のメモ書きが、〈美術館に行く〉という行動を因果的に引き起こしている。つまり機能主義的な観点からいえば、Inga の内的な信念も Otto のノート上のメモも、同等の因果的機能を担っている。そのため Clark と Chalmers によれば、ノート上のメモは Otto 自身の信念に他ならない。両者の違いは単に、心的状態が個体の内部で実現されているか、個体の外部で実現されているかという、表層的なものにすぎないというわけである。

Clark と Chalmers は、脳内情報と環境内情報へのアクセスの容易さの違いに依拠した、信念の EMT への想定反論もあげている。Inga はいつでも安定した形で自身の信念を参照できる一方で、Otto は彼のもつノートを紛失したりその記述内容を読み間違えるリスクがあるため、同じ機能を果たしていない。Clark と Chalmers はこのような想定反論に対して、以下のように応答する (Clark and Chalmers 1998, 15)。もし Otto にとってノート上のメモが大抵は信頼に足る形でアクセス可能ならば、(紛失や読み間違いによって) 信頼性やアクセス可能性が損なわれるリスクを孕んでいても問題にはならない。なぜなら Inga の信念もまた、外傷や酩酊などに伴い信頼性やアクセス可能性を損なうリスクを孕んでいるからである。Inga の信念も、〈大抵は

信頼に足る形で容易にアクセス可能〉にすぎない点は、Otto のノートと変わりない。すなわち信頼可能性やアクセス可能性という基準からいえば、心的状態と外的環境はやはり機能的に同等であり、信念の EMT が成り立つ。

信頼可能性やアクセス可能性が同等に担保されていれば機能的に同等であるといえるのか、心的状態と外的環境にそれ以外の根本的な違いはないのかなど、信念の EMT に対してはさらなる懐疑も突きつけることができるだろう。しかし本稿では、Clark と Chalmers の論証の妥当性についての検討は重ねない。たしかに、EMT の論証プロセスに対する批判は枚挙にいとまがないが、本稿の目的は EMT 自体の妥当性を問うことではない (cf: Adams and Aizawa 2001; Adams 2010)。本稿の目的は、記号計算の EMT と信念の EMT が正しいと仮定した際に、それらの道具立てを用いて〈拡張〉を示すことができる心的状態のタイプは他に何があるか、という EMT の射程の深さを測ることである。これは、EMT が真であるか否かとは独立の議論だろう。

(3) 筆者の主張

本稿では、記号計算の EMT と信念の EMT が成立していると仮定した上で、同じ説明構図でその他の心的状態にも EMT が可能であることを論じる。

(1) 認知的プロセス。記号計算の EMT を認めるならば、その他の認知的プロセスも同様に EMT を認めることができるだろう⁽¹⁾。認知的プロセスにはたとえば、学習や推論、意思決定などが含まれる。

(2) 志向的内容と機能をもつ心的状態。以下で示す通り、信念同様に志向的内容と機能をもつ心的状態であれば、信念同様に環境への〈拡張〉が想定可能だ。まずは機能主義的な観点から、信念という心的状態が備えている性質を考える。

心の哲学において信念は、〈志向性〉をもつ心的状態のひとつに含まれる (金杉 2007, 93-4)。志向性は〈ついて性 (aboutness)〉とも呼称される通り、〈何か他のものについてのものである〉という性質のことである。信ずるということは、〈何か〉を信ずることであり、内容を欠き空虚に信ずるということとはできない。たとえば、〈家の外で雨が降っている〉という信念は、〈外の天気〉についてのものであり、それを志向的内容として必然的にもつ。

そして、機能主義的に捉えた信念の重要な特徴として、特定の行動を因果的に引き起こすという点を無視することはできない。前節で Clark と Chalmers による信念の EMT を確認した通り、〈美術館は 53 番街にある〉という信念は、〈美術館に行く〉という行動を因果的に引き起こしていた⁽²⁾。

以上をまとめると、(1) 志向的内容をもつことと、(2) 因果的機能をもつ

ことのふたつが、信念の重要な性質である。心的状態の EMT を認める上で、このふたつは必要な条件であるといえる。

では、内容と機能の双方をもつ心的状態として、信念のほかにどのようなものが挙げられるだろうか。欲求や情動はそうした心的状態に含まれる。たとえば〈林檎を食べたい〉という欲求は、〈林檎〉を内容に、〈林檎を食べる〉という行動を引き起こす機能をもつ。同様に、〈蛇が怖い〉という恐怖の情動も、恐怖の対象である〈危険〉を内容に、〈危険から逃げる〉という行動を引き起こす機能をもつ。以上より、欲求や情動、それ以外でも内容と機能をもつ心的状態ならば、信念と同様に EMT を認めることができると考えられる。

(3) 志向的内容や機能をもたない心的状態。心の哲学上の一般的な見解に則れば、あらゆる心的状態が内容をもつわけでもないし、機能をもつわけでもない。はたして、内容や機能をもたないとされる心的状態、たとえば憂鬱なムードや痛みの感覚について、EMT を認めることはできないのだろうか。

内容をもつことと機能をもつことを EMT の必要条件と捉えるならば、そうした心的状態の EMT を認めることはできないだろう。しかし、憂鬱なムードや痛みの感覚といった、一般には内容や機能をもたないとされる心的状態が、内容や機能を本当にもたないのかを問い直す余地はある。もしこれらの心的状態が内容や機能をもつならば、EMT は論理的に可能である。

〈志向説〉によれば、あらゆる心的状態は内容をもつ（金杉 2007, 95-6）。たしかに一見すれば、憂鬱なムードは、何か特定の事態や対象についての心的状態ではない。それは何にも向けられていない単なる漠然とした感情のようである（金杉 2007, 96）。痛みの感覚についても同様で、それは痛みについての独特な感じであって、何か特定のものに向けられたものではないように思える。しかし志向説によれば、憂鬱なムードは〈世界全体〉あるいはそうした世界を感覚する〈自分自身の身体〉に対して向けられた心的状態であり、痛みの感覚もまた〈自分自身の身体状態としての痛み〉に対して向けられた心的状態である。であるならば、これらの心的状態も内容をもっており、内容と関連した行動を因果的に引き起こす機能をもつという考えは不自然ではない。つまり、〈林檎を食べたい〉という欲求が〈林檎を食べる〉行動を、〈蛇が怖い〉という情動が〈蛇から逃げる〉行動を引き起こすように、憂鬱なムードはたとえば〈世界から距離を置く〉行動を、痛みの感覚はたとえば〈ダメージを受けた身体箇所に対して注意を向ける〉行動をそれぞれ引き起こす因果的機能をもつとみなせるかもしれない。

以上をまとめると、内容や機能をもたないと通常解される心的状態も、志向説に基づけば、〈世界全体〉や〈自分自身の身体〉のように内容を広く捉え

ることで、内容や機能を帰属できるようになる。ただし、〈あらゆる心的状態は内容と機能に還元できる〉という強固な志向説を採用しない限り、痛みの感覚や憂鬱なムードが機能的側面に還元されない、その心的状態に内在的な現象的側面を認める余地は残る。本論ではこのような強固な志向説の立場は取らない。しかし、〈あらゆる心的状態は内容と機能を持つが、それらに還元されない内在的性質も持つ〉という弱められた志向説においても、これらの心的状態の現象的側面に関してはともかく、機能的側面に関しては少なくとも、Clark と Chalmers の議論に基づいて EMT を認めることができるだろう。

(4) (自己) 意識。これまで扱ってきた心的状態は一貫して、意識が意識以外の別の対象に向けられる構造をしていた。というのも、〈外で雨が降っている〉という信念や〈林檎を食べたい〉という欲求はいずれも自己の外に存在する事態や対象へ向けられた心的状態であり、憂鬱なムードや痛みの感覚も、世界全体や自分の身体の一部といった、やはり自己意識からその他の対象に向けられたものであったからである。

しかし、ほかならぬ自分自身に対して向けられた心的状態、すなわち意識の EMT を認めることはできないのだろうか。意識の EMT を認めるということは、言い換えれば、〈拡張された心 (Extended Mind)〉ならぬ〈拡張された自己 (Extended Self)〉を認めるということではないだろうか。実際のところ、Clark と Chalmers は、同論文の結部で〈拡張された自己〉の可能性を示唆している。

拡張された心は拡張された自己を示唆するのだろうか？ そのように思われる。多くの人は、既に自己というものが意識の境界線を越え出ていることを受け入れている。…Otto のノート上の情報は、たとえば、認知的エージェントとしての彼のアイデンティティの中心的な一部である。このことが導くのは、Otto 自身を、生物的有機体と環境資源の融合からなるひとつの拡張されたシステムとみなすのが最善であるということである (Clark and Chalmers 1998, 18)。

ただし上の引用箇所において注意が必要なのは、〈自己というものが意識の境界線を越え出る〉というように、Clark と Chalmers は自己と意識を概念的に区別している点である。つまり彼らの議論に則る限りにおいて、〈拡張された自己〉は〈拡張された意識〉を含意しない。それどころか同論文内のその他の箇所では、〈拡張された自己〉と〈拡張された意識〉が両立不可能であ

ることを示唆するような記述も窺える。

経験のような、いくつかの心的状態は、内的に決定されるのかもしれないが、他の〔信念のような心的状態の〕事例においては、外的な要因が重要な貢献を果たしている。…これらふたつの事例〔=信念の EMT における Inga と Otto の事例〕において情報は、意識にとって利用可能なように、また行為を導くのに利用可能なように、まさに我々が信念に期待する通りの信頼可能な形でそこに存在しているのだ (Clark and Chalmers 1998, 12-3、〔〕内は筆者の補足)。

これらの箇所では Clark と Chalmers は、経験すなわち意識のような心的状態は内的に個別化され、情報すなわち心的内容は意識が利用するという、極めて内在主義的な描像を打ち出している。つまり EMT は、環境媒体では機能的に代替不可能な意識の存在を前提している。ゆえに、志向説および機能主義的な観点から意識の EMT を論ずるのは、不可能だと考えられる。

(4) 今後の展望

本稿では、さまざまな心的状態のタイプに関して、Clark と Chalmers の議論に基づいて EMT を認めることが論理的に可能か否かを検討した。その結果、現象的意識以外の心的状態の EMT は論理的に可能と結論付けられた。しかし、EMT が論理的に可能であることと、EMT が実際にどのような環境媒体を用いて実現されるのかというのは、全く別の問題である。今後の研究課題としては、〈拡張〉の論理的可能性が示された各種の心的状態に関して、それらの〈拡張〉先となる具体的な環境媒体の候補を検討したい。

本稿で取り上げた各種の心的状態の EMT を現時点で網羅することはできないが、たとえば次のような環境媒体を考えている。推論の EMT には、Clark (2008)における(ただし、Clark はこれを記憶の EMT として挙げている)熟練のバーテンダーの例が当てはまるかもしれない (Clark 2008, 62)。Clark によれば、バーテンダーは、様々な特徴的な形状のグラスをカウンター上に順に配置しておくことで、どの客にどのカクテルを提供すべきかをいちいち脳内で推論せずに済むように工夫している。カウンター上のグラスの配列という環境媒体に〈拡張〉された推論とみなすことができるかもしれない。

欲求についてはどうだろうか。欲求の因果的機能を、対応する信念とペアとなって行動を動機づけることと捉えれば、To Do リストのような環境媒体を〈拡張された〉欲求とみなせるかもしれない。たとえば、私の内側に〈原

稿を書き上げたい」という心的な欲求がなくとも、To Do リスト上には〈原稿を書き上げたい〉と書いてあり（＝〈拡張〉された欲求）、私自身が〈原稿の締切は今日だ〉という心的な信念を抱いていれば、これらがペアとして〈原稿を書き上げる〉という行動を引き起こす。

情動の EMT に関しては、たとえば、村山（2022）において挙げられている Munch の『叫び』や Taylor Swift の“Red”のような創造的な芸術作品は、製作者ないし鑑賞者の内的な情動と同等の機能をもつ〈拡張〉された情動とみなせる環境媒体であるかもしれない（村山 2022, 4）。

もともと、ある環境媒体が〈拡張された〉心的状態と認められるためには、心的状態との機能的な同等性に加えて、十分なアクセス可能性と信頼性も必要であることを、Clark と Chalmers は信念の EMT への想定反論に対して言及していた。上で列挙した環境媒体が十分なアクセス可能性と信頼性を有しているのか、そのためにはどのような条件をクリアしていなければならないのかという点も、EMT の実現可能性を考えるうえで重要な論点だろう。

注釈

- (1) 本稿では簡便化のために認知的プロセスも心的状態として取り扱っているが、認知的プロセスを心的状態に含めてよいかは疑問である。Clark と Chalmers は、記号計算は ECT(Extended Cognition Thesis)、信念は EMT (Extended Mind Thesis) と表記を分けていることから、厳密には認知的プロセスを心的状態に含めないと考えられる。
- (2) ここでの主張は、信念が単体で行動を因果的に引き起こしている、というものではない。〈美術館に行く〉行動を引き起こすには、〈美術館は 53 番街にある〉という信念に加えて、〈美術館に行きたい〉という欲求を抱いている必要もある。いずれにせよ、信念が行動を引き起こす因果的機能の一端を担うことが示せばここでは十分である。

(5) 参考文献

- Adams, F and Aizawa, K, 2001, “The Bounds of Cognition”, *Philosophical Psychology*, 14-1, 43-64.
- Adams, F, 2010, “Why We Still Need a Mark of the Cognitive”, *Cognitive Systems Research*, 11(4): 324–331.
- Burge, T, 1986, “Individualism and Psychology”, *The Philosophical Review*, 95(1),3-45.
- Clark, A. and Chalmers, D, 1998, “The Extended Mind”, *Analysis*, 58-1, 7-19.

Clark, A, 2008, “Supersizing the Mind: Embodiment, Action, and Cognitive Extension”, Oxford University Press.

Putnam, H, 1975, “Mind, Language, and Reality”, Cambridge University Press.

金杉武司, 2007, 『心の哲学入門』, 勁草書房.

村山正碩, 2022, 『表出性と創造性：表出説を改良する』, 新進研究者 Research Note, 第 5 号: 11-18.

(一橋大学)